

北越雪譜

初編

中之卷

ル 4
6316
2



越雪譜初編卷之中

目錄



雪類ゆきるい人小災ひとこわざ ・次第下小づ

玉山翁ぎんざん雪の圖ゆきのず

縮ちぢの種類しゆるい

綾あや綸りん

織婦おりのむすめの發狂はつきちやう

御機屋おんきやの靈威まこと

菱山あやまの奇事きじ

狐火きつねび

雁かりの代見立しろみえだて

寺てらの雪類ゆきるい

越後縮ちぢ

縮ちぢの紵す並なみ紵績すなひ

織婦おりのむすめ

御機屋おんきや

縮ちぢをを晒さらち並なみ縮ちぢの市いち

雪中ゆきなか花水はなみづ祝いわいひ

秋山あきやまの古風こふう

狐きつねを捕とる

天あまの網あみ



雪譜卷之中

目録

雁の總立

法海川ぎの涉り

通計二十四條

北越雪譜初編卷之中

越後塩澤

鈴木牧之 編撰

江戸

京山人面樹 刑定

○雪類人ふ災也

吾住魚沼郡の内にて雪類の為小非命の死をうくる事其村の人の事を
 てふ記をあるごとくも人の不祥ある人姓名を詳ふせば○てふ何村とてふ所小家
 内の上下十人あまりの農人あり主人は五十歳をり妻は四十小とて世息は二
 十あまり娘は十八と十五とつとも孝子の聞ありけり一年二月のそとめ主
 人八朝より用ある所出行し其日も已小申の頃あるとて飯りきつてはさの間に
 とるべき用あるあつてけしむ家内不審ふかひ忤家僕をつきて其家小のり
 父が事をたづねふていきてつていふとていふとていふとていふとて家僕と
 そりて尋求しつて更小音問をきくも日もたや暮るとていふとていふとて家小飯

りきりくの一母小語のけしきい心得ぬるごとく心あすの処かか一人を走
 らせて尋ませけしふそ在家さふ志と夜四更の頃ふらふと主人の飯
 らび此事近隣に聞えて人々集り種々評議して居るをりも一老夫来り
 ていあうあうのええぬぬと我心あすりのさあぬとせやさんと来
 まりとのふまはらうあうときと主人の妻大いよろこび子どもらもくひ
 言語をそらうまがれをのぞの仔細をうろけけき老夫いやうをきけ
 西山の嶺半ふきからんとせ一時このあふ行逢何方とさうけき稲倉村
 行と行過ぬぬ我の宿へ取り足めて逢行過る頃例の雪類の音をきき
 うらびうの山とんと嶺を无事に通りてをよろこびつけあふあふを
 元難小行過ぬぬや万一ふ逢ふぬきりうと案どつ宿へのぬ今ふ飯
 りぬぬぬやあふふふのひく眉を皺めけき親子の心あふとききたの
 一うも案ふふひ顔見あふせ泪ううむむうの老夫いてををえとてふ

立之りぬ集居る若人どもをききてさうばあばあこの処ふいりてたぐも
 炬こらうよと立膝きけきびうりの老人がけりあうまうまらひ遠くたづ
 ねふ行一者もいまかたう今もその人とかうくあうの飯りなるんも
 えりうぐ一雪類のうまぬあううの不覚人あふあうをかの老奴あふい
 ことをいひて親子の心を苦しうといふ親子はてきふ励まき心慰酒肴を
 いぐて人ふもむいこををて皆打うつ炉辺に座列て酒酌うりや時うり
 て遠く走らる者ども立うり一ふ行方ハ猶まきりり○かくて夜も明けき
 村の者どもいさう聞一やどの人々此家小群り来り此上へ手あく木鋤
 を持家内の人々も後ふあふひかか老夫がひつるさこの処ふ至りけりきて
 雪類をふるふさのさあぬぬと一のささささ道を塞るる二十間餘り
 雪の土手をおせりうやてふ死すりともあふさの下をさうとづねんとも
 うけまばいらやせん人々佇立するさふかの老人うりて所為をあまて若



京水峯



農夫頓智借雜圖

雪譜卷之四

文治盛衰

たりかのつらさを打をんと一打らけり此ひきあやめりけん
 本堂不積る雪の片屋根石くともさかち土蔵のやうり不清水がりの池あり
 小和尚さびま小押落さ池小入るまをさびまの勢ひ小身ハ手鞠のごとく池をま
 もててえて掘揚る雪小半身を埋めさわとさけびるる小庫裏の雪をり
 ぬるあゆら馳さうり持る木鋤あう和尚を掘りけさば和尚大に笑ひ身もち
 をらる小聊も疲うけさ耳小掛る目鏡さつらうく不思議の命をさるりぬひぬ
 此時七十余の老僧く前小り何村の人の不幸小比ま万死小一生をえんとする
 天幸といひつる一齡も八十余ま元病小く文政のまあ小遷化せさき平日余小
 示してらるる我雪頼小撞さると此筆を抹りて居りり尊き佛經あり
 ゆゑたさやハと一字毎小念佛中て書居りりあう小雪頼小死さうり不不思議
 小命助りり一字念佛の功德さやありけんさば人ハ常小神佛を信心し
 悪事災難を免とん子をいのる神佛を信むる心の中より悪心ハいぬぬものこ

悪心の元災難をのり第一とをへらまき今も猶耳小残さうり人智を尽して
 のらさうさる大難小あハ因果のまうさむる処あうん人あをりありさ
 人家の雪頼小家を潰せ軍人の死さうさあま見聞あささこのま
 とてあるさば

○玉山翁が雪の圖

さだのと一玉山翁が梓行せさ軍物語の画本の中小越後の雪中小た
 うひとこの圖あり文中ハ深雪とありさあも十二月のさうる小あはる軍兵
 とのさ奉止をえさ小雪ハ浅く見ゆ 越後の雪中馬足ハさうりゆあ小農人さ雪中
 牛馬を用ひさるんや軍馬をさあるるを馬上の戦ひ
 雪あさだ国の人の画作さ雪の实地をさるるさ越後雪中の真景ハ甚さ
 ぐりさうり画ハ虚さまさささばそのさぬあ一死さあさけささあさり小た
 がひささ玉山の玉小産あうんも惜けささかて書通の交り小まらさく牧之が拙さ
 筆めて雪の真景種々寫し猶常小さるる真景もさると春の半ささ三国

様をもり縞も飛白も甚上手ふりて種々の奇工をいせり機織婦人
よりの伶俐ありたる故なり

○縮の種類

魚沼郡の内より縮をいせし事一様ありて村より出毛品ありて
自らむりより其品小の熟練と他の品小移らざるゆゑ其所の品を
産せ事左のごとく

▲白縮ハ堀の内町在の村と又浦佐組小出嶋組の村と

▲模様ある或ハ飛白いりたる藍錆とハ六塩澤組の村と

▲藍縵ハ六日町組の村と ▲紅桔梗縵のるハ小千谷組の村と

▲浅黄縵のるハ十日町組の村と又緝の弁慶縵ハ高柳郷小かぎより右

りとも魚沼一郡の村と此餘ちをいせし事二三ヶ村ありて専ら小せし事

ありて舎てあるさび縮ハ右村里の婦女ら雪中小籠り居る間の手業と

かゝる末年賣ぎちをいせし事十月より糸をうとせりて次の年二月

うらふ晒しをいせし事白縮ハちとある所ハかりせし事やうとせりて人ハ文あるものやと

あハちいせし事とも手練ハよくあるもの之村の婦女らちとせりて丹精を尽

せりてちとせりて小冊ハ尽して其あつきを下し記せり

○紵

縮小用なる紵ハ奥及會津出羽最上の産を用ふ白縮ハちとある所ハかりせし事やうとせりて人ハ文あるものやと
あつてちとせりて影紵といふもの極品とせりて米澤の撰紵と称するも上品之越後の
紵商人の国よりいせりて紵をいせりて国小賣る紵を此国中もいせりて
古言ハ麻を古言ふとせりてハ綜麻のるハ麻も紵も字美ハちとせりて布小
織る料の糸をいせりて紵をいせりて作ら俗也と字書ふとせり

○紵績

余一年江戸小旅宿せり頃或人のいせりて縮小用なる紵を績せりてその処の婦

人誘ひあせせと一家ふあつまりその家ゆく用ふる紵を績うとえ此人々たがひふその
 家をめぐりて績うとと聞きくはゆとひまひらるる人どかる空言そらごとをばひひあつてけん
 まりあつて魚沼一郡も廣きゆゆ右やうふまる処もあつていひありとも
 下品のちびも用ふる紵をのりろん下品の編あのりら姑舎あやう論うぜ中品以上用
 ふるを績うとゆらうむ所ところの座ざをきざりあむ體たいを正ただしくや呼吸こきふふつて手を動うごせ
 て為な作さをるも定座ちやうざ小居をる假かり小居ぬて其為な作さをるせはのつらう心鎮あやむ
 糸いと小太細ふとちひきて用もちふならごとく常並つとみの人の紵をを績うとゆ唾液つばを用もちふと
 ちびもの紵を績うとゆ茶碗ちやんやうの物もの小水すゐをさつひとてきをのりふ事こと毎ま小鹽しおハ座ざを
 清きめててきをるまあり

○ 綉いしよ綸りん

糸いと小作せうさくるゆも座ざを定め體たいを困こ位ゐるゆ績うとふかろ綉いしよ綸りんその道具たうぎその手術てしゆ
 その次第しだいの順おんその名な小呼物よひのり許ゆる多種たふあり繁細はんさいの事ことを詳つひふせんはくごハ

けまハ言いふとをもくうとせむよりかりをるるまでの手作てしよまて雪ゆき中ちゆう小在あ
 上品じゆん小用せうふる処ところの毛けよりも細こき糸いとを終あ兆ちやう舒疾しよしやくてあつてゆ雪ゆき中ちゆう小籠こり居を
 天然てんぜんの湿氣あつめを得えざるな為な難がたく湿氣あつめを失うは糸いと折をるゆありをまてととら
 力ちからより断きるゆあり是故このゆゑ小上品せうじゆんの糸いとをあつて所ところハ強つよき火氣かきを近ちか付づむ時ときり
 より織かるゆ後あとて二月ふたつきの半なか小ゆり暖氣だんきを得えて雪ゆき中ちゆうの湿氣しつき薄うすき時ときハ大おほる針はりや
 の物もの小雪せうを盛もて機たの前まへ小置おきての湿氣しつきをかりて織かるゆもありてまてのゆ小付つ
 て熟思じゆくし小績せうを織かるゆ蚕かいの絲いとゆ多た陽熱やうねつを好この布ぬのを織かるゆ麻あの糸いとゆ多た陰冷いんれいを好このむ
 まて績うとハ寒さむ小用せうひき温あるゆゆ布あハ暑あ小用せうて冷ひやるゆゆ是こハ天然てんぜん小陰陽いんやうの
 氣き運うん小属ある所ところあつて件けんの如ごとく雪ゆき中ちゆう小糸いととち雪ゆき中ちゆう小織かり雪水ゆき小洒しやぎ
 雪ゆき上かみ小晒ひを雪ゆきありて縮ちぢむゆまて越後縮えちごちぢハ雪ゆきと人と氣力きりよく相半あ半はんゆ名産めいさんの
 名なあり魚沼郡うをぬまぐんの雪ゆきハ縮ちぢの親おやとのゆ蓋け薄うす雪ゆきの地ち小布ぬのの名産めいさんあるは
 ハ糸いとの作りつくりゆゆるゆ越後縮えちごちぢ比ひて知しるゆ

織婦

凡織物を専業とする所ある織人を抱へて織物を利とて縮むるに
 別小无き二国の名産の織婦を抱へて織物を利とて縮むるに
 縮むる縮むる一端の縮むるに小人の手を勞するに
 小賃錢を當て算量するに小の雪中小簞居婦女等が手を穿くせざるに
 の信業の縮の糸四十綾を一升との上との縮糸二十升より二十三升中
 至る但一袋の二をぢつ通るも一升の糸八十綾の布幅四方小緯糸も
 小随ひて併さる地を縮むるに小の縮糸二十升より二十三升中
 も九百二十度手を動かしを以て一端を二丈七尺とて二万四千四百八十四
 度手を動かしを以て一端を二丈七尺とて二万四千四百八十四
 績を以て縮むるに小の縮糸二十升より二十三升中
 縮むるに小の縮糸二十升より二十三升中
 縮むるに小の縮糸二十升より二十三升中

之かる縮を僅の價にて自在小着用するに俗小の要の縮を縮むるに
 娶をえたるも縮の伎を第一とて容儀ハ次とて此の縮小親するに小娘の
 幼より此伎を手習するに第一とて十二三歳より太布を縮むるに小娘の
 五六より二十四五歳までの女氣力盛る頃小の縮糸二十升より二十三升中
 せび老小臨むるに縮糸二十升より二十三升中
 之極品の詭物ハ其品不能熟するに上手をえたるに何方の誰かと指小を
 るに多とのかむるに小の縮糸二十升より二十三升中
 為小他人小まる辛苦之唐の秦翰玉村女の詩小最恨むるに小娘の
 て他人の為小嫁の衣裳を作るといひハ宜る哉

織婦の羨狂

ひと世ある村の娘を以て上との縮糸を縮むるに小娘の
 を論せびて縮むるに小の縮糸二十升より二十三升中



娘の男

京水筆

御機おんごころの靈威れいゐ織女おりめ鉄狂てつきやうの圖



手をかゝる丹精の目敷を歴て足るふ織ありしをさきしやより母が持きて
 ときて娘はやく見えて物をあけしをもちかきしひたすまじいふ
 夕やどる煤いろの暈あるを三母さぬいゆせんやと縮を頼ふあ
 哭倒しけりてまより我狂とありさるべの浪言をのちて家内を狂ひ
 をえく両親娘が丹精しる心の内をかひきて哭ふたけり見る人もあま
 てる袖をぬりしけりて友人あふぐものごとせり

○御機屋

貴重専用の縮をあらゆ家の辺りふつりし雪をもその心へ挿きて住居
 の内ゆるまじけ畑のふゆぬ明りもよき一間をよしく清めあせりき
 ちたるべ四方ふ注連をひきこしその中央ふ機を建る是を御機屋と唱
 て神の在りごとく衆尊ひ織人の外他人を入まじ織女ハ別火を食し御機
 にかゝる時ハ衣服をあらし塩垢離をとり鹽漱きこし身を清む日毎

ふかくのごとく紅潮をいむるハ勿論之他の娘らも今日誰かの御機屋
 を拜ふまのるやうふい之至極上手の女ふあまま此ををを建るや
 うけまバ他の婦女らごまを羨る比喩ハ階下ふありて昇殿の位を
 ぐごご

○御機屋の靈威

神ハ敬ふふより威をままふ宜る哉よりその物も守りて敬い信
 んままバ靈ある空しる人のままて草鞋ふ衆人の信せしふより
 てのちハ草鞋天王とて祭りし幸五難組ふんをりしや神くま
 を敬ハ靈威ある冥々の天道ハ人の知を以てをりあまふ村の娘
 例の御まやふありて心を澄しをかりて居たりし傍の窓を
 くと音あふものあり心ふまてかかあまふ立よりてひきまふふを
 心を通る男をりし人目の園もありし心うとくかまをを

家の後ふいり窓のゆふ立る男を將て木小屋小入ぬ女は娘の母故り
 來りもや小娘のをぬをえりしゆり志きりふその名をよびけしはふ
 木小屋小きつけ遠鷺に男ハ逃奔り娘ハ心顛倒して身を織りも打志
 かしきふけりしゆり御機ふより織んとあけふ倏急仰ふ倒と
 落血を吐て絶入けり母此状態を見て大ふかどろ紅をりしより助け起し
 まづ御をよよりいざさあふゆりりし氣息あつて死し
 ごとく父ハ同村のるふが家小存をよび久し醫をまねきえ薬をとり
 一がそのあしもろく兩親はささくあよりよりをせよりのゆも娘の側
 小在てあしきさし手て束て死を俟のまあるふゆりの男來りさも
 耻らふさあゆり人の後小座し欲言としてしげ頭を低て涙をかろけり人
 こそをこまむ同村の某が次男けり此男やえ膝をまめ娘の母小對ひ声を
 ひとめりしやう今いふゆをうつし中せん我ハ娘御と二世の約束をあこる

ゆのこまむのやど人ひきをまきむまめを誘ひいし小入ん身のよりゆひ
 こまふかそきこまむ逃奔りしゆりもめりかか火ありしと聞きつら思ふ小
 織りし身をこまきて良きおん機ふかりゆひる御罰あらんこそゆと我ぞ
 する罪ある人いさるげとも余処目ふせんいそらおそろし命をうけし契り
 するこまむもあがりしゆりもめりしゆりもめりし命ふ代りて神小御罰を説りん
 するゆも此まゆりむまめりて死あつて我が命をまきこりてふをまき人
 こまゆり証人のことゆひし赤裸ふりて髪をまきおた井のゆふあり奇
 まゆりふ水を浴雪の上小躰居るふやん唱つてゆりけり時しも寒氣肌
 を貫くをりしゆりも凍も死まきありさあふこまゆり人まむしめて
 せきと知り實あもそまゆり水を浴るゆりけり神明の男
 實心を憐し人々のゆりをも納受すくけんゆの娘目の覚るることくまき
 あがり母をよびけしは衆奇異のあしをさしむまめの側あつたりゆひ



雪の中晒縮圖
 此男は雪の上へ
 晒す

○医師
 雪舟小
 病家へ

ありどもその年々よりてきこづのふひあり市の目もその相場年の
 気運ふつきく自然さきなる相場上げは三をんのちよこをんふのびり二をんち一
 をんふ位を前もりてごてちよこをんふ手間賃を論せざるものゆゑ誰がかりさ
 ちよこ初市ふ何程ふ賣さうよゆと手あがりさうをどらるるを巻と一或ハ
 その伎ふよりて要ふゆらんといふる娘もあま利を次ふて名を争ふあ
 の多ふ市ふちよこを持やハ兵士の戦場ふゆらふごとく一さちよこの相場ハ大
 中ハ穀相場ふちよこさうて事ハ前後を年凶をさハ穀ハ上り縮ハ下る年
 豊るさハ縮ハ上り穀ハ下る豊凶の万物ふ係る事此一を以て知る一ささる
 万民豊年をいのけさるや

○わらわら

我塩澤の方言ふわらわらとハ雪類ふ似て非なるもの十二月の前後ハ
 あるものと高山の雪深く積りて凍る上ハ猶雪ふく降り重り時の気

運ふよりていさささゆて凍る山頂の大木ふつりさる雪風さゆの為ふ
 一塊り枝よりおちりて山の峰ふ随ひて轉び下りさるるびさる雪を丸て次
 第ふ大をさる幾万斤の重きをさるるもの幾丈の大石を轉り走ごごく
 こまが為ふあさるて雪かせささる雪の洪波をさる大木を根をさふは
 大石をもかかて人家をもかか潰さるる事あり此時ハさるる暴風
 雪を吹きさる凍雪空ふ布て白昼も立地ふ暗夜とある事雪類ふちよこ
 ちよこ前もりてごてちよこをんふ手間賃を論せざるものゆゑ誰がかりさ
 ちよこ初市ふ何程ふ賣さうよゆと手あがりさうをどらるるを巻と一或ハ
 その伎ふよりて要ふゆらんといふる娘もあま利を次ふて名を争ふあ
 の多ふ市ふちよこを持やハ兵士の戦場ふゆらふごとく一さちよこの相場ハ大
 中ハ穀相場ふちよこさうて事ハ前後を年凶をさハ穀ハ上り縮ハ下る年
 豊るさハ縮ハ上り穀ハ下る豊凶の万物ふ係る事此一を以て知る一ささる
 万民豊年をいのけさるや

一間ハ塩垢離しほごりふききりてを神使かみの席せきと一絲筵いとひらを布ぬりて上座かみハ毛氈けりたんをまき上段かみの間まハ表うらり刀掛やぶをかく次の間まハ親族しんぞくハさうさうてき人ひとより祝美いわみのちう物ものをうへく嶋臺しまだいをふ賀賀がが咏うたをたへさうさうのがさめぐと門かどハ幕まくらをうちよじやとの処ところをまかりあげててふ齋院さいいんの壇だんをたえ玄関式げんかんしき臺たいハ准のりふ家内けいだいのものりつとも衣服いふくをあうさう神使かみをまう神使かみのさうりよりさうさうをせきりて跋扈はくこより大声おほこゑで正一位せいいち三社宮さんしやぐう神使かみをむく神使かみのさうりよりさうさうをせきりて跋扈はくこより大声おほこゑで正一位せいいち三社宮さんしやぐう使者しやと大呼おほこゑ神使かみを見て亭主ていしゆ地上ちじやうハ平伏へいふく一神使かみを引ひての正殿せいだんハ座ざさむ行列ぎやうぎやうハ家の左右さゆうハありて隊たいをうまきて神使かみハ烟盒えんこく茶吸物ちやくぶつ膳部ぜんぶをいへて数献すうけんをまきむあうさう壺かハ盃さきをうふ三方さんぱう肴やくをさむ献酬けんじゆ七献しちけんをかきさう盃さきとてふ祝美いわみの小謡こわうをうさう事終ことしゆうりて神使かみハ他たハ新姻しんいんありて家けありて又また到いたる式前しきまへのどと一此こゝ神使かみハうの花水はなみづを賜たまふ事を神かみより氏子うぢこハ告つふふの使つかひハ神使かみ社頭しやとうハ飯いひ立たより個肴こやくの神使かみ社内しやないハ飯いひりてをえと踊おどりの行列ぎやうぎやうを繰くりて一番いちぱんハ傘かさハ錦にしんまうけあり

のころひにをうけ旋まわり端はなハ鈴すずをつけ又裁き張はりの物ものさめくうをまきける傘かさハの上うへハ諫鼓かんこを飾かることを持もつもの二人ふたり紫むらさちりめんハて頬ほをつつてむきひさまかろ紅紋べにもんをうけ行禪ぎやうぜん禪ぜんハかろ嘿げい呑いん白はくまてて祭礼まつりハ用もちハ傘かさハ物ものハ古ふるハ羽葆うほ蓋がいの字じを訓しり所謂しゆゐん織オリハとて神かみ輿こ鳳輦ほうげんを覆おほハ奉ほうるべき錦蓋にしんがいとのり猶説なほせつありて長ながけは省しやうくさて二人ふたりハ假面かめんをあうて細女こゝろめハ扮はる者もの一人ひとり簪かんざしのさうハ紙かみハ女に門かどを多おほくつにつけかてて次つぎハこまも假面かめんハ猿田さるだ彦ひこハ扮はるもの一人ひとり麻あしハ作りて纒おろ帽ぼうやうの物を冠かむり手て拵しなのさきを赤あかくさうて男根おとこねハ表示ひょうじをうてて三さんハんハ法服ほふくを美びくくがざりて山伏やまぶし螺らをうて四よハんハ小児せうじの誓ちか言ごハ身みをうて随まハ次つぎハ大人おとなの誓ちか言ごハ固麻こま上下じやうげ杖つゑを持もて非常ひじやうをいへて五ごハんハ踊おどの者もの大勢おほしやう花はなハ浴衣ゆふいハ正月しょうげつ人勢ひとしやうハ色いろハある細帯こゝろおびをうて群行ぐんぎやう里り言ごハこまをうてうてえあうてのりて降臨かうりん象しやうハ皇孫こうそん日向ひなたの高千穂たかちほの峯かみハ天降あまふりりゆひハ縁ゆかりハの心こゝろハんと嘿げい

花水祝浴水畧圖



堀の内驛花水祝ひ
噪劇の図原本の
草画を此小載て

別小至細の圖を
示さるもの

梓刺の勞と
省子存り

梅まきそまむこ
この布や等も
水を注ひ
堀の内を

山東廣島

鈴木牧之圖



翁りの指説あり一々をぶくまで婿の方まで此をぶく場をもつら人の中へ
 まうけかきあてて一足建を一足あてて一き手桶二つ水をとるは松葉と
 昆布とを水引くむきびつけむらの上におき銚子盃をさぐ水取とて
 婿の水をあぶる者二人副取とふもの二人あてなまきいさひひき一げふ
 りてつむむらひ細帯ゆてをぶりのまゝをすつをぶり家ふちあけ行列
 ひらき踊人がむらひのめづらむらひむらひをぶるその唱歌ふ
 「めでうくの若松さぬは枝も榮ゆる葉も茂る」まんやめどこの花水こえやせあひ
 あびせん我 夫男「ふ」をりくくあやうをうえてういをぶる事慣る踊の
 けいごかの水とりらもその程を見く婿水三献を祝らせうの手桶の水を二人して
 左右より婿の頭へ滝のごとくあびせかるとまを見く衆人拵躍てめで
 と賀ふむていそのまゝむらひをせ入りをぶり八捕家あもか一入りてをぶりう
 とぶる七八遍ふてぶらくと立ちり再びぶらめのごとく列をぶる他の

婿の家ふらる事一々をもぶる八捕後の家までいりてあつものいりあも入
 りてをぶりあつくと田舎りののを祝するまもまも此日ハ遠近の老若男女
 あまをいんとて儀のごとくあつまりあつてあつて熱果まら筆下ふ
 尽かす○按る小婿水水は事ハ男の相火水女の阴の水をあぶ
 て子をあつてむらの兇事あて妻の火を番との祝事と此事室町殿の
 頃武家の俗習よりかてりて農高もことふ倣ひく中行り事事物ふん
 たり貝原先生の歳時記ハ松永 江戸めてハ宝永の頃まで世上一同正月十五日の
 彈正の替事より起るとり祝義のやうふりて大流流行り多婿水恨ある者事を水祝ひ
 よせささぬくの狼籍をさる人もまゝありて人の死亡あもひひきささ
 うりも多正徳の頃国禁ありて事絶たりとていひむらり物語といふ
 のふ見えたり国初以来のふを記する宮本元禄 件の花水祝ひハ神秘と有ハ
 中をさうりふへる人の老ての作り別ふゆえともあつて雪のつゆふその大畧を記して好古家

の談柄小具そのもの

○菱山の奇事

越後の頸城郡松の山一庄の総名由て許多の村落を併命する大庄といふも山間の村落ゆへ一村の内といふも平地なり一松代といふ所の平地にて農家軒を連ね外番の謠ふをえ一松山鏡といふも此地そのうへにあり鏡が池の古跡もてあり今に池もあはれやうふ埋まるとその跡といふまより按る小松山かそのうへに鏡破の繪巻といふものを原とて作るなりん此多手記ゆも右の松の山の事見えてうさて松の山の庄内小菱山といふ所の形三角なるゆゑの名も一山ふちうた処小須川村須川村當浦村といふあり此ひ山毎年二月ふ入り夜中ふかざりて雪顔あり其ひさ二里小聞ゆ傳てりふ白髪白衣の老翁幣をもちてるまふ乗り下るといふまに此うへに須川村の方二十町余の処真直小突下りて年ハ豊作と當浦村の方

斜小くてい年ハ凶作と其驗少も違ふ事なり一年の豊凶雪顔小係る事此山小のて限るも一奇事といふべし

固ふり余が旧友出雲崎小住丸山氏の家祖父ハ博学の聞えあり一入ありき余二十年前丸山氏の家小遊節をとり一時祖父が宝曆の頃の著述を越後後名寄といふ書をいせしり三百卷自筆の寫本と名寄といふものと越後の風土記より一国の神社佛閣名所旧跡山川地理人物国産薬品の類すべてを部を分圖をいして通曉しやせくある精撰此書小右菱山の説も粗々といふとどきのといひて引を菱山のつらさをいふつらき此書の事をいひてせしめける精撰大成の書も空しく秘笈ふありて世ふあはれざるが惜けはばあふりし

○秋山の古風

信濃と越後の国境小秋山といふ処あり大秋山村といふを根えとて十五ヶ村をまぐる秋山といふと秋山の中央小中津川といふありて

西ふ十五上村あり東の方ふ在る村ハ
 ●市越後ふどくま ●清水川原村人家三軒あり
 ●三倉村人家 ●中の平村二 ●大赤澤村九 ●天間村二 ●小赤澤村八軒 ●中の原十三
 ●和山軒西ふある村 ●下結東村 ●逆巻村軒 ●上結東村九軒 ●前倉村軒 ●大秋山村
 人家八軒ありて此地根元の村あり相傳の武器と持しりのもありて天明卯羊の凶年ふ代
 ありてりてふりえ糧とて一村のこもを餓死とて今ハ草原の地となりてときりり
 ▲屋敷村十九 ▲湯本あり此地東ふ苗場山天小算をて連岳とてふつぎ西ふ赤
 倉の高嶺雲を凌て衆山とてふ双ぶ清水川原越後の入り口湯本の信濃ふ越の
 險路ののこ一夫是を守りて六万卒も越え難き山間幽避の地と里俗の傳ふ此地ハ
 大むり平家の人の隠る所といふ牧之謂り鎮守府將軍平の惟茂四代の右
 胤奥山太郎の孫城の鬼九郎資国が嫡男城の太郎資長の代まで越後高田の辺
 鳥坂山小城を構へ一國小威を震ひて謀叛の聞えありて鎌倉の討手佐木
 三郎兵衛入道西念とてまづ戦ひて終ふ落城せり此時貴族の落人なる此
 秋山小隱とてあるんり里俗の傳ふ平氏とのるもよりあるふ似たり此秋山

中古今の風俗のつら残まりと聞ゆ多一度ハ尋ねるとおもひ居りて此地を
 よくありて業内者を得たりてゆ多偶然おもひて業内が教ふまじせ米味
 噌醬油鯉節茶蠟燭まを。用意して從者ふのせとて立りてハ文政
 十一年九月八日の事あり死その日ハ秋山小近き見玉村の不動院ふ一宿次の日
 桃源を尋ねる心地とて秋山小ふ入りぬき入り口ハ清水川原とのありて
 ふいふんとて道の傍ふ丸木の柱を建注連を引ひて中央ふ高札ありて
 なる事ぞと立りてまづ小童のうきてるやうのいろは文字とて「わのそあるむ
 うののハこまよりいよま」トあるせり業内曰秋山の人ハ疵瘡をおとる事
 死をおとるが如しゆんともまづのうとるものありて我子といふも
 家小君とせむ山小假小屋を作りて入息おき喰物をとてびやうののまて
 錢あるものハ里より山伏をよのそ祈らまもありまま九人ふりて十人の死
 る此ゆ多秋山の人他所ゆきまをうとるありとまま何事の用をも捨て

逃くふとさむく此地ゆへに宛瘡を著甚と稀二十年一人あるのみと語り
 さて清水川原の村ふりうへふ家二軒あり家居の作りまは地野ふらふり 志述あり
 小やまふりて立中ふてまふりまぐ猿飛橋を見玉とて案内の前立と申此
 秋山の道いさむ所の人々ふりまふりて道のまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 びる所まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 ありかてうの中津川の岸ふりまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 飛橋との橋のまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 絶壁まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 むらひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 橋をまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 渡り八二十間あり橋の廣さ三尺ふりまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 對ひの岸ふ藤綱を岸の大木ふりまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ

とせふとつるさ危けまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 く劣む此橋を渡るゆへとひまひ案内のまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 玉玉ひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 をりまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 橋を寫しまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 こひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 の臥まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 壁双び緑山連りまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 農夫二人まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 橋揺くとて危きまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ
 うの藤綱ふまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ

足を灰のふくみ入珍くりてを喰ふ所は柱の中を惜気もつて
 焼く火影小照ををるべき末のむきあひ色黒く肥太りと醜くをりて裾をま
 かりあげて虫をひくか又かきけきと耻らふさぬもせび二人の姉は色白く七玉丸
 双へる美人之菓子を喰うる頼又あつて打多する面き一愛形はかたきや
 之かる二双の玉を秋山の田夫が妻ふせんハ可憐琴を薪とて鼈を煮るが姫主人ハ
 里地の事をよく知りて話も分る類ゆ多所の風俗をさう移しふそのの語りさ
 あしきしをさうふ記を ○此地近年公税を聞ふの事とも米麥を生ぜざるゆ
 僅の貢をるを 御役ふいりて信濃と越後との他の村名王の支配をうけ且那寺
 をも定めしこと冬ハ雪二丈餘もつりて人のあきもさるゆ多此時人死むる寺ハ
 送るゆりささきハ此村ハ山田を氏とせり助三郎といふのの家ハむりより持傳ハ
 たる黒駒太子と称する画軸ありて事を借りて死人の上を二三んごうて事を引導
 とて私ハ葬る寺をささきりせんハむりよりて事ゆきまをせしり 秋山ハ山田
 と福原の

氏のと右の助三郎ハ山田の徳本家之太子の画像といふ太子のさうふつをささき馬ハのり
 て雲の中ハありさぬ地よりりり牧之助三郎の家ハいりりの一軸をえんとこのハ正月七
 月の初日をささき ○此地の人上食ハ栗ハ稗ハ小豆をも交て喰ふ下食ハ栗稗ハ稗
 乾菜をとすて喰ふ又枋の實を食とせ ○婚姻ハ秋山十五ヶ村をささきり
 て他所ふりて婦人他所之男をりて親族不通とて再び面會せざるをむり
 よりの習せとせ ○秋山中ハ小寺院ハささき之庵室もささきハ幡の小社一あり寺ハ
 ささき之無筆とささきハ心あるもの里より手本を得てゆはゆはをささき人
 をバ物識とて尊敬を ○山中ゆ多牧ハ牧屋をささきゆりのまきと ○深山幽僻の
 地ハささきハ番ハハより木綿をも生ぜざるゆ多衣類ハささきハささきハささき ○山ハ
 いらとの草ありその皮を製して麻ハ替て用を為と ○菊ハかぐりりり時牧之
 いらとの形状をささきハささきハささきハささきハささきハささきハささき
 本草ハささきハささきハささきハささきハささきハささきハささきハささき
 ささきハささきハささきハささきハささきハささきハささきハささきハささき

べきのこしらをりらるるあや草の形状を聞きりてあまきこめどてー○秋山の
 人へて冬も着るすすて即ち嘗て夜具といふのみ冬ハ終夜中ハ大火を
 してその傍小眠る甚寒ふいさバ他所より稿をゆゑ作りをきりて思ふ入りて
 眠る妻あつものへくまををひろく作りて夫婦つゝ手をも寐る○秋山ハ夜具を持する
 家ハ此翁の家とやふ一軒あるのこをきりてのしらあて織するふりらのこをいし布
 子のまをり大なるゆゑ宿り客のさあふまをのこをて牧之のこ一病者一時此夜具ハ外
 世の所がわろく身ふても○稿ふとやきゆ多鞋ををり以男女徒跣あて山ふもをこり
 く○人病あまふ米の粥を喰せく薬とを重きハ山伏をむくくのち病をいのち
 くるる源
氏あつもんえ
 古風こ○鏡を持する女秋山中ハ五人ありとて松山くもの故事
 おひあこり○此地の人をへく
眞實濃厚ふく人と争ふことろく
 色慾ハ薄く博奕をあつむ酒屋あけは酒
 のむ人々むりよりとて一まぢゆてもねまをあつ人々といり實ハ肉食の仙
 境之○かくて次の日やふの橋といふをこりて湯本ハ宿り温泉ハ浴り次の日

西の村ををりて上結東村ハ宿り猿飛橋をこりてその日見玉村ハ宿りて家ハか
 どりさあぐ記をきりてあまきこめどてー文多けまのせど秋山記行二巻を
 編りて家ハ蔵む○朽の本字ハ
 實の食方翁ハ聞りてをりて記ハ凶年の心得とて朽の實ハ八月熟りて落るをい
 ろひ煮てのち乾り手ハ接てあつき篩ふりて法皮をきり以善ハ布をきりて粉ハ
 煮るをまきよるる水をうちてあめをきりて布ふつゝ水ハゆりてわく
 四五日ふりてとりて絞りて水をきりて乾りあつその白き事雪のこりて是を
 粟稗ふりてふませ又ハ朽をりも食とを又餅ハもまると別種ありとて
 ふそのあつハ朽ハ似たりとて○此秋山ハふるぬりて山村他国ハもあつりてを聞
 して珍りて福とあつりて又さゆあつりて記せり○秋山の産物木鉢まげ物
 るの山をきりて繩板るぬ秋山ハ良材多りといふも村中をめぐり中津川屈曲
 深き所浅き所ありて伐をきりて又ハ牛馬をつらぎまバ良材を出りてかく
 財をうる事難けまバ天然の貧地と

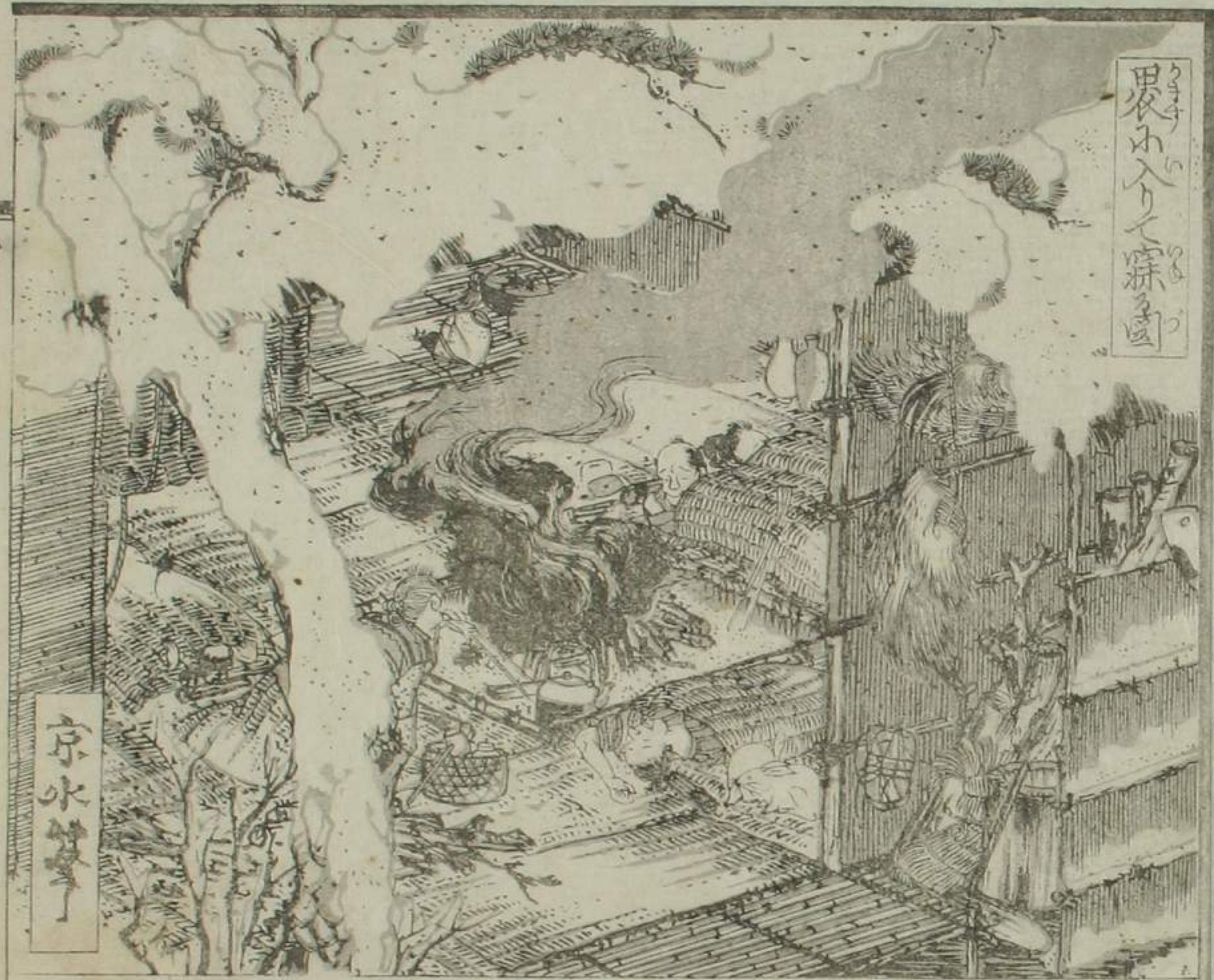


秋山絶壁の圖



同猿飛橋の圖

牧之壺



畏小入り之寐園

京水



雪堂の園

ころ狐もふきりちりちりかきつるを喰ひ尽し猶もさびさびとくまの穴小あをを
 ころんとし身をまぢり倒れ入りて穴小入りしをむきつるものをころひつてゆんよる
 小尾のまじりづる程小作りまうけさる穴まじり再びりづる子叶の雪ハ深夜小
 あふひてまじりころりうまぢちううゆ穴をかぢるもあぢぢんくとして
 終中ハ性を勞らも捕へんとをりりのことをなす水をとまきつてあふ小入る
 あやりの雪の穴まじりゆへハ水も漏れ狐ハ尾を振りて水小入りむ入ハ辺り小
 ありてうまぢ死せんともる時うまぢ尻をひるを避る狐尾を揺るるをさつ溺死さ
 るを知り尾を採り大根を抜ぐごとく一ハ狐を得る穴ニツもニツも作りあぢあぢをり
 した時ハ二足も三足も狐を引抜るあり之ハ凍りて岩のやうなる雪の穴まじり
 土の穴ハうまぢ得ものるまじり自在をりて逃さる一ハまじり雪国ハうまぢゆりまじり
 雪のついでふあぢせり

○ 鴈の代見立

我園雪盛る時ハ鳥さの食をまきもの一もあぢあぢ久ハ山野の鳥と掃
 春小いり雪降りやう頃諸鳥をる二月小いりても野山一面の雪の中ハ
 清水のまじり水气温るあぢ雪のまじり消る処もありこま水鳥の下る処ハ
 雁こまをるまじりまじり二三羽らふをりて己まじり求食さる糞をのりて喰あぢの
 目とハ狸言ふこまを雁の代見立とハ雁のかくまぢハ友鳥を集ひまじりて
 かぢあも求食せんとして朋友小信あぢ人も耻ぢるゆへあぢを心をまじりて糞
 をまじりあぢ代見立の糞あぢまじり種々の術を尽し雁のこまをまじりて
 捕ふ雁もまじりてこまをまじりてあぢ人小あぢせりて糞小土をうけてうけ
 かくて代見立あぢこまを食あぢりて処ハあぢ小土をうけてあぢまじりて
 智あぢ人小あぢり人まじりてまじりても知りてあぢまじり糞小土をうけるをさつ
 其辺りの矢頃よまぢ処ハ人の入る程小機をまじりてあぢあぢものを雪小作り後
 小入り口をつけ内ハ洞あぢ雁のをるまじり方小穴をつけてあぢまじりてまじりて
 雁ハ不

